

五ヶ瀬町所在

ひぐち  
樋口遺跡

国道218号五ヶ瀬高千穂道路（室野工区）整備事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2024

宮崎県埋蔵文化財センター

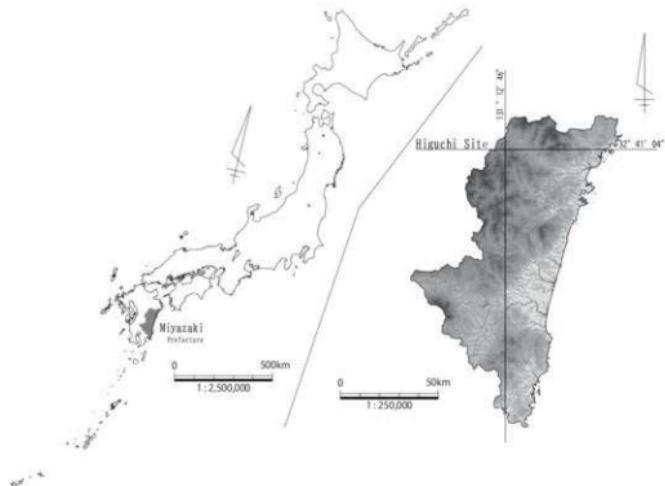


五ヶ瀬町所在

ひぐち  
樋口遺跡

Higuchi Site

国道218号五ヶ瀬高千穂道路（室野工区）整備事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書





# 序

宮崎県教育委員会では、国道 218 号五ヶ瀬高千穂道路整備事業に伴い、五ヶ瀬町三ヶ所に所在する樋口遺跡の発掘調査を令和 4 年度に実施しました。本書は、その発掘調査の記録を掲載した報告書です。

今回報告する樋口遺跡では、縄文時代のものと考えられる陥し穴跡や、弥生時代後期に属するとみられる竪穴建物跡、縄文時代の土器や石器、弥生時代後期～古墳時代前期の土器、中世・近世の陶磁器類などが出土し、遺跡が立地する斜面地で連綿と展開した人々の生活の一端が明らかになりました。

本書で報告する発掘調査成果や出土遺物等は、学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用し、郷土の歴史や埋蔵文化財保護に対する理解の一助といたします。

最後になりましたが、発掘調査にあたり、御協力いただいた関係諸機関および関係各位、地元の方々に対し心より厚く御礼申し上げます。

令和 6 年 2 月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 吉本 正典

## 例 言

- 1 本書は、国道 218 号五ヶ瀬高千穂道路（室野工区）整備事業に伴い、宮崎県埋蔵文化財センターが令和 4 年度に実施した、五ヶ瀬町大字三ヶ所に所在する樋口（ひぐち）遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、国土交通省延岡河川国道事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。調査期間は令和 4 年 7 月 26 日から令和 4 年 11 月 30 日（実働 73 日間）である。
- 3 発掘調査は、留野優兵・川嶋信平・守部丘大・本部裕美が担当し、宮崎県埋蔵文化財センター各職員の協力を得た。現地調査における図面作成及び写真撮影等は、調査担当者が分担して行った。
- 4 発掘調査及び報告書作成に伴う空中写真撮影は九州電力株式会社、自然科学分析（放射性炭素年代測定・樹種同定）は株式会社古環境研究センターにそれぞれ業務委託した。
- 5 整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターにおいて、主として留野が整理作業員の補助を得て行った。デジタル図化作業は川嶋・守部の協力を得て留野が行った。また、遺物の写真撮影は主に東憲章が行った。
- 6 本書で使用した位置図等は、国土地理院発行の電子地形図 1 : 25,000 を基に作成している。
- 7 本書で使用した各種略記号は、以下のとおりである。

SA：竪穴建物跡 SB：掘立柱建物跡 SC：土坑・陥し穴跡 SZ：その他 gr：グリッド  
K-Ah：鬼界アカホヤ
- 8 本書に掲載している土層断面及び土器の色調等については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（2008 年版）に拠る。
- 9 本書における図中の方位は、国土座標第 II 系（世界測地系）の座標北（G.N.）、国土地理院発行地図は真北を指す。また、本書中の座標値についても世界測地系に準拠しており、標高は海拔絶対高である。
- 10 本書の執筆と編集は留野が行った。
- 11 出土遺物およびその他の諸記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターにおいて保管・収蔵している。

## 本文目次

### 第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 発掘調査の方法	2
第4節 発掘調査の経過	2

### 第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4

### 第Ⅲ章 調査の成果

第1節 遺跡の立地と基本層序	5
第2節 主要遺構	6
第3節 出土遺物	12

### 第Ⅳ章 自然科学分析

### 第Ⅴ章 総括

### 挿図目次

第1図	周辺地形図	3	第11図	SC120・SC328 遺構実測図	10
第2図	周辺遺跡分布図	4	第12図	SC453 遺構実測図	10
第3図	基本土層図	5	第13図	SC476・SC524 遺構実測図	11
第4図	遺構配置図	6	第14図	SZ614 遺構実測図	11
第5図	SA33 遺構実測図	7	第15図	遺物実測図①(土器・土師器類)	13
第6図	SB491 遺構実測図	7	第16図	遺物実測図②(石器・鉄製品類)	14
第7図	SB492 遺構実測図	8	第17図	遺物実測図③(陶磁器類)	14
第8図	SB493 遺構実測図	8	第18図	暦年較正結果	17
第9図	SB615 遺構実測図	9	第19図	暦年較正年代マルチプロット図	18
第10図	SC92 遺構実測図	9	第20図	遺構埋土別分布図	20

### 表目次

第1表	基本土層注記	5	第5表	調査区内検出土坑の計測値一覧表	16
第2表	遺物観察表①(土器類)	15	第6表	樋口遺跡の放射性炭素年代測定結果	17
第3表	遺物観察表②(石器・鉄製品類)	15	第7表	樋口遺跡における樹種同定結果	19
第4表	遺物観察表③(陶磁器類)	16			

### 写真目次

写真1	SA33 炉跡出土炭化種実	14	写真図版3	.....	25
写真2	樋口遺跡の木材写真	19	写真10	SC328 完掘状況	
写真図版1	.....	23	写真11	SC473 完掘状況	
写真3	樋口遺跡遠景		写真12	SC524 完掘状況	
写真4	調査区全景		写真13	SC120 炭化材出土状況	
写真図版2	.....	24	写真14	SB491・492・493 完掘状況	
写真5	調査区中央部土層確認用壁面		写真図版4	.....	26
写真6	調査区東壁土層断面		写真15	出土土器類	
写真7	調査区周辺法面土層断面		写真16	出土陶磁器類	
写真8	SA33 炉跡検出状況		写真17	出土石器類	
写真9	SC92 完掘状況		写真18	火打金	

# 第Ⅰ章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

一般国道 218 号は、熊本県熊本市を起点とし、熊本県上益城郡山都町及び宮崎県西臼杵郡五ヶ瀬町・高千穂町・日之影町を経て延岡市に至る総延長 146 km の幹線道路である。急峻な山間部を縫うように横断する同路線は、急カーブや急勾配の坂が連続することから、その一部の五ヶ瀬町大字三ヶ所から高千穂町大字三田井までの延長 9.2 km 区間を、自動車専用道路「国道 218 号五ヶ瀬高千穂道路」として整備が行われることとなった。また、この道路は、大雨や大規模地震などの災害発生時に国道 218 号の代替道路となり、宮崎県北地域と熊本方面を結ぶ唯一の緊急輸送道路一次ネットワークとしての機能確保も目的としており、将来的には九州中央自動車道（九州横断自動車道延岡線）と一体化する路線として、平成 30 年度に新規事業化された。

この事業予定地内における埋蔵文化財の取扱いについては、令和元年度に事業実施側である国土交通省九州地方整備局延岡河川国道事務所から県の埋蔵文化財保護当局である宮崎県教育庁文化財課（県文化財課）に対して協力依頼があった。令和 2 年 3 月、県文化財課は、事業予定地内の分布調査を実施し、周知の埋蔵文化財包蔵地及び埋蔵文化財が包蔵されることが推測される複数箇所の範囲について報告を行った。この報告を基に両者協議の結果、これらの範囲については、事業計画の進捗に伴い用地買収が終了した部分から、試掘・確認調査を随時実施することになった。

県文化財課は、令和 3 年 3 月と 9 月、道路起点付近の五ヶ瀬町大字三ヶ所の周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲外である箇所の試掘調査を実施し、部分的に埋蔵文化財が残存することを確認した。これらの試掘結果を基に、五ヶ瀬町教育委員会と県教育委員会で協議した結果、令和 3 年 11 月、試掘調査で埋蔵文化財が確認された箇所を中心とした範囲が新たな周知の埋蔵文化財包蔵地「樋口遺跡」として登録された。

今回の発掘調査実施区域においては、延岡河川国道事務所から令和 4 年 3 月 2 日付で埋蔵文化財発掘通知が提出された。埋蔵文化財の取扱いに関する協議を両者で重ねた結果、建設を計画する樋口遺跡の一部分の約 2,500 m<sup>2</sup>については、現状保存が困難であることから、やむを得ず記録保存措置として発掘調査を実施することになった（同年 4 月 18 日付で宮崎県教育庁から発掘調査指示の回答）。同年 4 月 26 日、国土交通省九州地方整備局延岡河川国道事務所と宮崎県の間で発掘調査委託契約が締結され、同年 7 月、県の発掘調査機関である宮崎県埋蔵文化財センターによる発掘調査の実施へと至ったものである。

## 第2節 調査の組織

樋口遺跡の発掘調査・報告書作成にあたっては下記の体制で実施した（令和 4 ~ 5 年度）。

【調査主体】 宮崎県教育委員会

【事業調整等】 宮崎県教育庁文化財課

主査 沖野 誠（令和 4 年度）

主査 谷口 晴子（令和 5 年度）

#### 【発掘調査・整理作業及び報告書作成】宮崎県埋蔵文化財センター

所長	菊村 祐司（令和4年12月まで）
	吉本 正典（令和5年2月から）
副所長兼総務課長	片伯部 真一（令和4年度）
総務課長	寺原 尚徳（令和5年度）
総務担当リーダー	阿波野 ゆかり（令和4年度）
	原田 佳奈子（令和5年度）
調査課長	東 憲章（令和5年度より副所長兼任）
調査課調査第二担当リーダー	平井 祥蔵（令和4年度）
	甲斐 貴充（令和5年度）
調査課調査第二担当	留野 優兵（本調査・整理作業・報告書担当）
調査課調査第二担当	守部 丘大
調査課調査第二担当	川嶋 信平
調査課調査第二担当	本部 裕美
調査協力等（五十音順）	五ヶ瀬町教育委員会・五ヶ瀬町第5公民館

### 第3節 発掘調査の方法

グリッドの設定 調査区全体を国土座標（世界測地系）に拠る 10 m × 10 m のグリッドに設定し、南北方向のグリッド線に数字、東西方向のグリッド線にアルファベットを付与して、その交点をグリッド名とした。

作図記録 発掘調査の円滑化・迅速化を図るため、遺物の出土位置の記録に伴う三次元情報の取得及び遺構の作図等については、トータルステーションと連動した電子平板【(株) CUBIC 製の「遺構くん」ソフト搭載ノート型パソコン】を使用した。ただし、遺構図作成においては、使用機器の特性や使用者の技術、作業の進捗等により各遺構の土層断面図等は調査員が図化を行った。また、一部の遺構については、Agisoft 社の SfM/MVS ソフト Metashape で作成した 3D モデルから生成したオルソ画像を実測の参考とした。地形測量における等高線は、電子平板で取得した任意のメッシュデータの記録と遺構上端の標高を加えたデータからソフトウェア上で作成、現地にて検討・修正したものを掲載している。

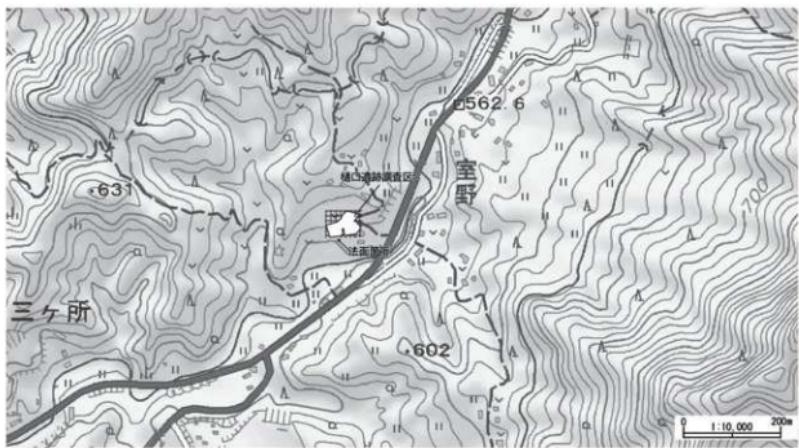
写真記録 遺構や遺物出土状況等の写真撮影機器としては、一眼レフデジタルカメラ(フルサイズ:3,600 万画素)を使用した。デジタル画像の保存形式は Tiff と Raw 形式を基本としている。遺構面の空中写真撮影については業務委託によるドローンを用いた撮影を行った。

### 第4節 発掘調査の経過

発掘調査は、令和4年7月26日～令和4年11月30日まで実施した。所在地は宮崎県西臼杵郡五ヶ瀬町三ヶ所10527-3他、調査対象面積は2,500 m<sup>2</sup>である。調査経過の概略は次のとおりである。令和4年7月26日から重機を用いて近世～現代の耕作土と推定されるI～IX層の除去を行った。同時に現場事務所の設置、駐車場の整備等を行った。8月から人力による掘削作業を開始し、調査区西側中央部で掘立柱建物跡3軒、調査区北東部で竪穴建物跡1基・掘立柱建物跡1軒、調査区南東側で陥し穴跡1

基、その他調査区内各所で土坑やピットを多数確認した。安定した遺物包含層は調査区内に残存していなかったが、調査区西側の地形のくぼみに堆積したに、ぶい黄褐色土（SZ614）から弥生時代終末期～古墳時代前期頃の遺物がまとまって出土した。11月22日にX層上面で空中写真撮影を、その後11月30日まで構造の掘削作業及び記録作業を行い、調査を終了した。

調査期間中、10月4・5日に五ヶ瀬町内の中高生を対象とした現場見学会、11月22日に地域住民を対象とした現地説明会をそれぞれ行った。



第1図 周辺地形図

## 第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

### 第1節 地理的環境

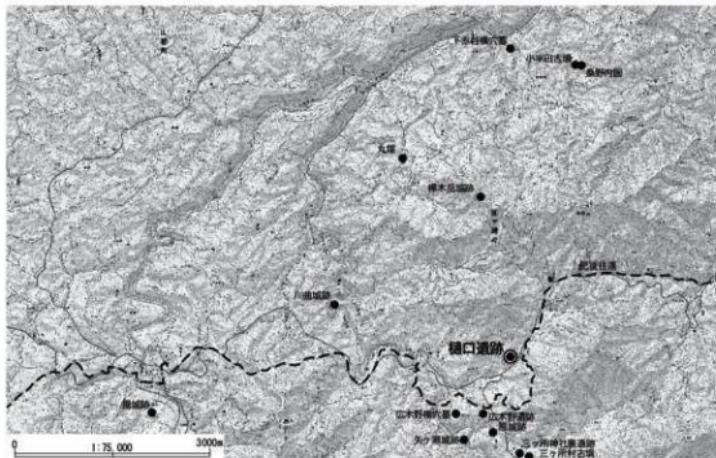
樋口遺跡が位置する西白杵郡五ヶ瀬町は、九州のほぼ中央部、宮崎県の北西端に位置する。宮崎県庁所在地である宮崎市からは直線距離で約80km離れている。北東は赤塚岸山から北に延びる稜線と五ヶ瀬川を境界として高千穂町、北西は白岩山から熊本県旧蘇陽町市街地へと伸びる稜線と五ヶ瀬川を境界として熊本県上益城郡山都町、南は白岩山から黒岳をつなぐ稜線を境界として椎葉村、南東は黒岳から赤塚岸山をつなぐ稜線を境界として諸塙村と接する。

五ヶ瀬町の町域は、最も長い部分で南西から北東に23km、北西から南東に12kmで、河川流路や山岳稜線に沿っている。町内を南北に流れる五ヶ瀬川とその支流の三ヶ所川は、町の北部で合流して熊本県と宮崎県の境を為す。町域は九州山地に含まれ、標高1,000m以上の山々が並んでいる。なかでも祇園山山頂付近では、石灰岩から4億3,000万年前のサンゴや三葉虫、ウミユリなどの古生代の生物化石が見つかっている。これらは九州島内で最も古い層の1つである祇園山層に含まれるもので、九州山地を構成する中生代層の秩父類帶と共に五ヶ瀬町内の地形の基盤となる。古生代・中生代層からなる低地部

分は、更新世に阿蘇山に由来する火碎流噴出物によって埋積され、その後河川による浸食を被り、現在見られるような起伏の小さい台地地形や、阿蘇溶結凝灰岩の崖からなる深い谷地形が形成された。谷地形をなす阿蘇山に由来する火碎流噴出物の上には、さらにアカホヤ等の火山灰層が堆積して小規模な台地地形を形成し、台地沿いに流れる小河川が、砂岩・蛇紋岩などから構成される地層と共にこれらの台地を侵食して傾斜の緩やかな地形を形成している。

## 第2節 歴史的環境

五ヶ瀬町内で行われた本格的な発掘調査事例は少なく、表探資料と合わせて断片的に歴史的事象が知られている。ここでは樋口遺跡が所在する五ヶ瀬町の歴史的環境について、旧石器時代から中世までの調査結果と共に概観する(第2図)。五ヶ瀬町内では現時点で旧石器時代の遺跡・遺物の出土事例はない。縄文時代の遺跡としては、三ヶ所神社裏遺跡で早期の縄文土器片が採集されている(乙益 1960)。古墳時代の遺跡としては、下赤谷横穴墓群・三ヶ所村古墳・小半田古墳・丸塚・広木野遺跡・広木野横穴墓群が確認されている。丸塚では子持勾玉の採集が記録されている他、下赤谷横穴墓群では発掘調査が行われており、鉄刀などが出土している(五ヶ瀬町教育委員会 1990)。広木野遺跡では、古墳時代後期の竪穴建物跡が見つかっており、須恵器・土師器等も出土している(宮崎県埋蔵文化財センター 1997)。古代においては『倭名類聚抄』に五ヶ瀬町域を含む五ヶ瀬川上流域全体が臼杵郡智保郷と呼ばれ、中世になると『建久図田張』に妻万宮(現西都市都萬神社)領として臼杵郡高智尾社八町、領主は弁済使土持太郎禰宜と記され、後に高智尾庄と呼ばれるようになる。中世には原城跡・矢ヶ瀬城跡・坂本城跡など各地に山城や陣跡が確認されている(宮崎県教育委員会 1998)。また、現在の国道 218 号線に沿うルートで、五ヶ瀬町内を現在の延岡市と熊本市を結ぶ街道である肥後往還が通っており、近代に下って西南戦争の際は、薩摩軍・官軍の双方が日向・肥後の戦線を移動するために利用していた。



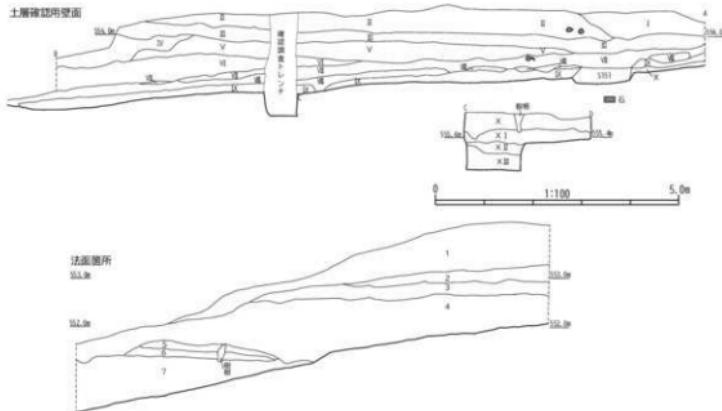
第2図 周辺遺跡分布図

## 第Ⅲ章 調査の成果

### 第1節 遺跡の立地と基本層序

樋口遺跡は、五ヶ瀬川支流の室野川北岸沿いに展開する緩やかな谷地形の傾斜面に立地しており、周辺の標高は約 550 ~ 570 m であり、調査区内の標高は 554 ~ 559 m である。調査区の位置する斜面頂上の平坦面には現在、住宅が立ち並んでおり、隣接する斜面には段々畑が造成されている。調査以前は、調査区も水田及び畑として利用されていた。

基本土層は、第4図構成配置図に示した調査区内中央の確認用壁面と下層確認トレンチ、調査区の南に位置する法面箇所で確認した。調査区内の基本土層として I ~ XII 層、法面箇所で 1 ~ 7 層を認識している。本遺跡の基本層序の概略は第1表のとおりである。



第3図 基本土層図

第1表 基本土層注記

土層箇所注記 層番号	土色	記述
I	暗褐色土 (1.0V8/3/4)	表土・透水土。黄褐色土 (Ref. 5V8/7/3) が斑状に混じり、非常にしまりがよく、粘性はない。
II	黒褐色土 (7.5V8/7/8)	造成土。径2mmの黄褐色土 (Ref. 5V8/7/3) のブロックが混じる。しまりがよく、若干粘性がある。
III	灰褐色土 (7.5V8/4/2)	造成土。砂質で非常にしまりがよい。粘性はない。
IV	灰褐色土 (7.5V8/4/2)	造成土。褐色土 (Ref. 5V8/6/3) のブロックや炭化物が多く混じる。しまりがよい。
V	灰褐色土 (7.5V8/6/2)	旧水田層。しまりがよく、小礫が混じる。鉄分の沈殿が見られる。橙色土 (Ref. 5V8/6/3) のブロック、炭化物が混じる。粘性がある。
VI	灰褐色土 (7.5V8/4/2)	旧耕作土。小礫と炭化物が混じる。
VII	褐褐色土 (7.5V8/3/2)	旧耕作土。小礫と鉄分の沈殿が混じる。しまりがよく、粘性はない。
VIII	灰色土 (7.5V8/2/2)	旧耕作土。しまりがよく、粘性がある。
IX	褐褐色土 (7.5V8/2/1)	旧耕作土。褐色土 (Ref. 5V8/6/1) の鉄分の沈殿のブロックが混じる。
X	褐色土 (7.5V8/4/1)	この層の上面で透水土・透構を検出。しまりがよく、粘性はない。炭化物粒を含有する。
XI	にひく褐色土 (7.5V8/6/2)	しまりがよい。
XII	にひく褐色土 (7.5V8/7/3)	アカホヤ相当層。ブロック状に褐色土 (Ref. 5V8/3/2) を含有する。砂質、法面での2層に相当する。
	黒褐色土 (7.5V8/2/2)	非常に粘性が強く。しまりがよい。3mm大的黑色結晶を含有する。法面での4層に相当する。

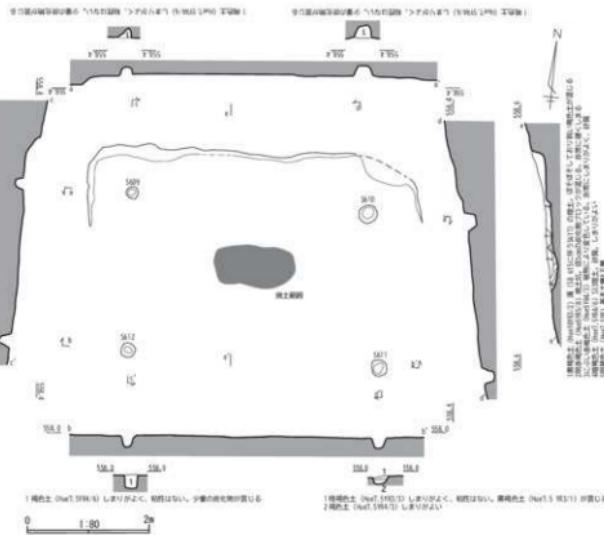
法面箇所注記 層番号	土色	記述
1	培養土 (7.5V8/4/6)	表土・草根付で混じる。アカホヤ層。しまりがよく、粘性はない。調査区内 XII 層相当。
2	褐褐色土 (7.5V8/3/2)	アカホヤ層以前の旧表土。
3	褐褐色土 (7.5V8/3/2)	アカホヤ層以前の旧表土。非常に粘性が強く、しまりがよい。
4	褐色土 (7.5V8/4/2)	しまりがよい。褐褐色 (Ref. 5V8/5/8) のロームと黒褐色土 (Ref. 5V8/3/2) が混じる。
5	褐色土 (7.5V8/7/2)	しまりがよい。
6	褐褐色土 (7.5V8/5/8)	ロームの土層。しまりがよく、黑色結晶が混じる。
7	明褐色土 (7.5V8/5/8)	

## 第2節 主要遺構（第4図～第14図）

樋口遺跡の発掘調査では、陥し穴跡3基、竪穴建物跡1基、掘立柱建物跡4棟、その他多数の土坑、ピットが検出された。多くは基本土層X層上面で検出されている。出土遺物や放射性炭素年代測定の結果から、遺構の時期は縄文時代後期から17世紀前半の近世初頭までのものと考えられる。遺構内からの遺物の出土は少なく、安定した遺物包含層も検出されなかった。近世以降の耕作・造成による影響を受けたものと考えられる。以下、主要な遺構について報告する。



第4図 遺構配置図

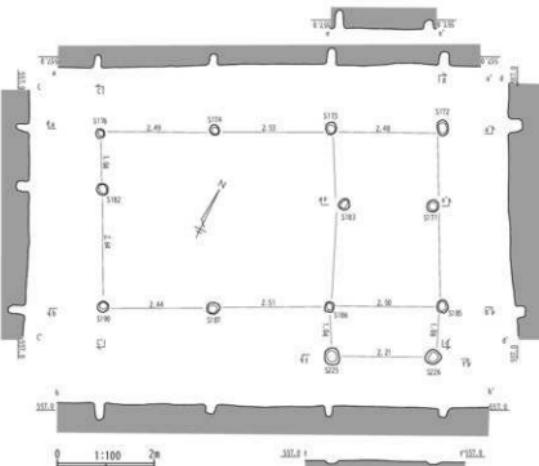


第5図 SA33 遺構実測図

#### SA33 竪穴建物跡（第5図）

基本土層X層上面のE-2・F-2grにおいて検出した。削平を受けており、北側と東側・西側の一部の掘り込みを検出した。規模は東西5.4m×南北1.6m、平面形は隅丸方形を呈しており、深さ0.2mである。断面の形状は、三角形を呈し、斜面の傾斜に沿って北から南に向かって浅くなっている。これはSA33の廃絶後、土砂の流出や崩落、切り合うSB615の建設に伴う整地によって削平を受けたものと考えられる。

床面では柱穴S609～612を検出した。柱穴は床面の四隅に位置しており、距離は東西3.9～4.1m、南北2.5mである。柱に囲まれた床面中央では、熱を受けて赤化した焼土を検出した。赤化した焼土は、東西0.75m×南北0.60m、深さ0.1mの範囲に見られ、その周囲には炭化物が散乱していることから炉跡と考えられる。焼土周辺の土を水洗して回収した炭化物には、オオムギ・堅果類等と



第6図 SB491 遺構実測図

みられる炭化種実が含まれていた。焼土の周囲から採取した炭化物を対象に放射性炭素年代測定を行った結果、 $1900 \pm 20$  BP の年代を得ている。

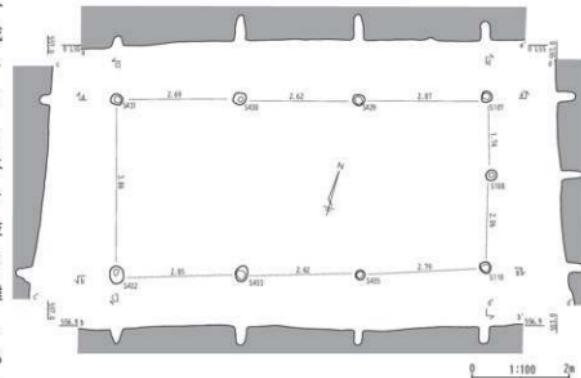
SB491 挖立柱建物跡（第6図） 基本土層X層上面のC-3grにおいて検出した。規模は桁行3間、梁行2間（一部3間）、身舎面積31.9 m<sup>2</sup>である。建物は東西棟で、梁行の主軸方向はN-18°-E。SB491を構成する柱穴は、S171～174・176・182・183・185～187・190・225・226の13基である。柱穴の規模は、径0.23～0.3m、深さ0.15～0.45mである。柱穴から柱の抜き取り痕や柱痕は検出できなかった。柱穴間の距離は、桁行が2.45～2.54m、梁行が1.05～3.9mである。柱穴からの出土遺物はないため、時期を特定することはできないが、SB492・SB493とは柱穴の埋土がそれぞれ黒褐色土で共通しており、梁行方向が揃っていることから、3棟は近い時期に使用されていたと考えられる。

SB492 挖立柱建物跡（第7図） 基本土層X層上面のD-3gr中央において検出した。規模は桁行3間、梁行2間（一部1間）、身舎面積32.4 m<sup>2</sup>である。周辺の遺構との切り合い関係はない。建物は東西棟で梁行の主軸方向は

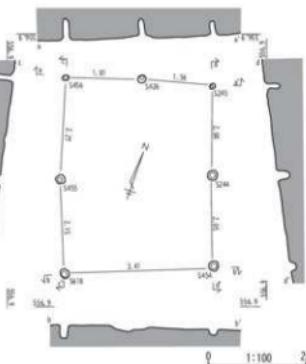
N-19°-E。SB492を構成する柱穴は、S107・108・110・113・429～435の9基である。柱穴の規模は、径0.23～0.31m、深さは0.16～0.45mである。それぞれの柱穴から柱の抜き取り痕や柱痕は検出されなかった。柱穴間の距離は、桁行が2.63～2.88m、梁行は1.74～3.86mである。柱穴からの出土遺物

はないため時期を特定することができないが、SB491・493とは柱穴の埋土がそれぞれ黒褐色土で共通しており、梁行の主軸方向が揃っていることから、近い時期に使用されていたと考えられる。

SB493 挖立柱建物跡（第8図） 基本土層X層上面のC-4grにおいて検出した。規模は桁行2間、梁行2間、身舎面積15.7 m<sup>2</sup>で、桁行の主軸方向はN-19°-E。SB493を構成する柱穴は、S244・245・425・426・454～456・618の8基で、柱穴の規模は径0.16～0.28m、深さ0.1～0.56mである。それぞれの柱穴から柱の抜き取り痕や柱痕は検出されなかった。柱間の距離は、桁行で2.04～2.28m、梁行で1.57～1.86mである。柱穴からの出土遺物はなかったため、時期を特定することはできないが、SB491・492



第7図 SB492 遺構実測図

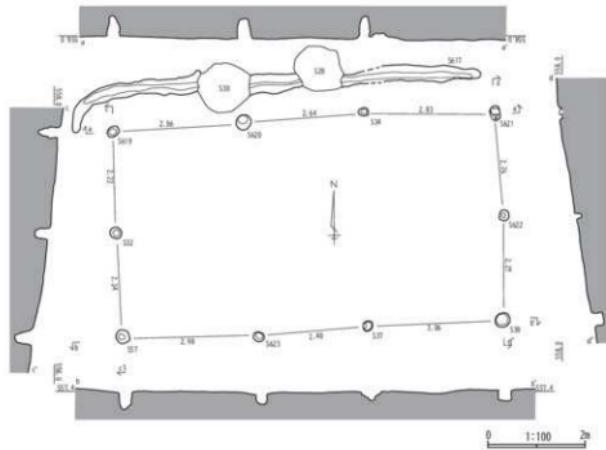


第8図 SB493 遺構実測図

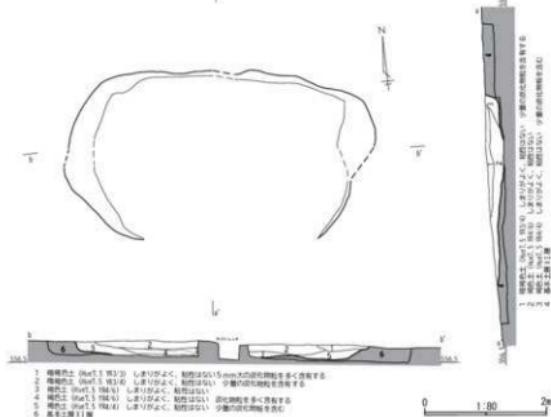
とは柱穴の埋土がそれぞれ黒褐色土で共通しており、桁行の主軸が崩っていることから、近い時期に使用されていたと考えられる。

SB615 掘立柱建物跡（第9図） 基本土層X層上面のE-2・F-2grにおいて検出した。規模は桁行3間、梁行2間、身舎面積37.8 m<sup>2</sup>で、桁行の主軸方向はN-3°-E。SB615を構成する柱穴は、S32・34・37・38・57・619～623の10基である。柱穴の規模は、径0.22～0.25 m、深さ0.15～0.42 mである。それぞれの柱穴から柱の抜き取り痕や柱痕は検出されなかった。柱間の距離は、桁行で2.4～3.0 m、梁行で2.2～2.3 mである。柱穴からの出土遺物はなかったため、時期を特定することはできない。SB615は北側に雨落溝と考えられる遺構（S617）を伴っている。溝の長さは東西9 m、屈曲した南北1.1 m、幅0.3 m、現状の深さ0.2 mである。北側桁行と西側梁行の角に沿って、溝も屈曲している。S617は、S30とS28に切られしており、SA33を切っている。

SC92 竪穴遺構（第10図） 基本土層X層上面のE-3・F-3grにおいて検出した。削平によって、北から南に向かって深度は浅くなる。南側では掘り込みを確認できず、西・北・東側の平面形は隅丸方形を呈する。遺構内で柱穴や焼土の集中は検出してない。埋土には炭化物を多く含んでいた。残存する遺構は、



第9図 SB615 遺構実測図



第10図 SC92 遺構実測図

東西長4.75m、南北長2.18m、深さ0.27mである。遺物は出土していない。埋土中の炭化物を用いて放射性炭素年代測定を実施した結果、 $1730 \pm 20$ 年BPの結果を得ている。

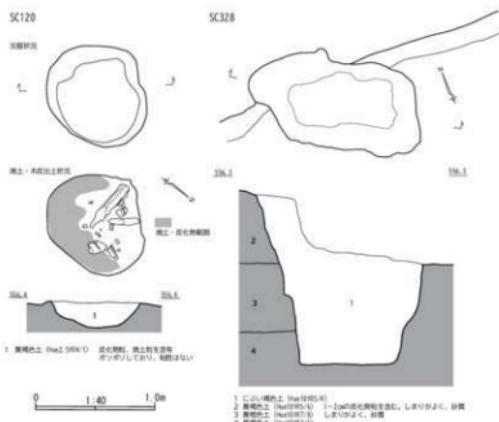
#### SC120 土坑（第11図-左）

基本土層X層上面のE-4grにおいて検出した。平面形は円形を呈しており、南北0.8m、東西0.8m、深さ0.2mである。埋土は黄灰色で、基本土層VII層に下層の炭化物と灰が混じったものである。埋土下に炭化物、炭化した木材、灰が堆積している。

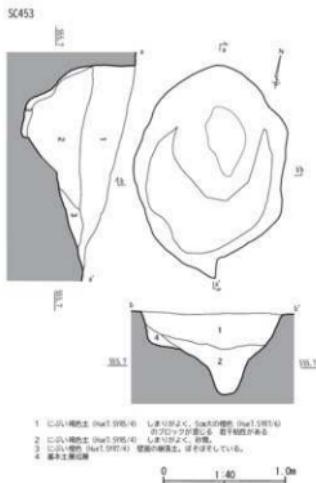
た。遺構床面の一部が被熱によって赤化していることから、木材等がSC120内で燃やされた後、埋められたと考えられる。炭化材を対象に放射性炭素年代測定と樹種の同定を実施し、年代 $180 \pm 20$ 年BP、樹種に薪材として利用されることの多いクスノキ科とサクラ属が含まれているという結果を得ている。以上からSB120は、焚火等で一時的に薪を使用した後、埋め戻されたと考えられる。

**SC328 埋し穴跡（第11図-右）** 基本土層X層上面のE-4gr北東側において検出した。長軸1.3m、短軸0.8m、現状での深さ1.5mで、遺構の南側上半分は削平されている。断面形状は逆台形、底面は長軸0.7m、短軸0.35mの長方形を呈する。遺構壁面土層の観察で基本土層X層からアカホヤ層下位の基本土層XI層まで掘削されている。埋土は褐色土の単層で、短期間のうちに埋没したとみられる。形状や掘削深度から埋し穴跡と考えられるが、出土遺物はなく、底面で逆木茂は検出していない。埋土中の炭化物を用いて放射性炭素年代測定を行った結果、 $3680 \pm 20$ 年BPの年代を得ている。

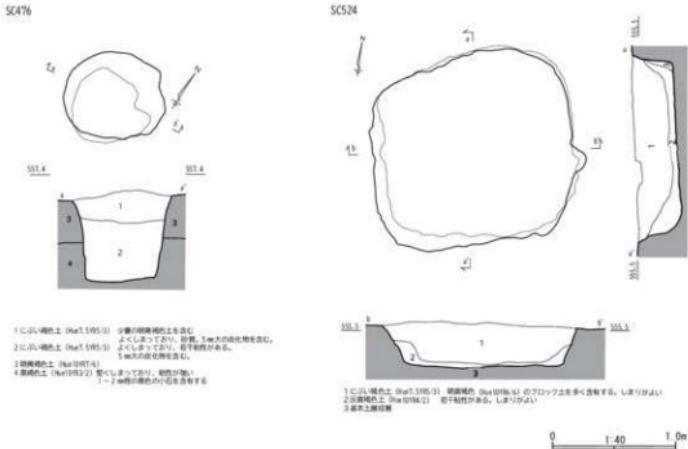
**SC453 埋し穴跡（第12図）** 基本土層X層上面のB-4・5grにおいて検出した。長軸1.7m、短軸1.2m、深さ1.1m、平面形は南北に長い長楕円形を呈する。東西方向の断面形は砲弾形、南北方向の断面形は南側に一段テラスをもち、北側に向かって深くなる。遺構の埋土は褐色である。基本土層XI層を掘り込んでおり、下層の埋土は橙色土の小粒を含んでいる。形状から埋し穴跡と考えられる。出土遺物はないため、時期は特定できない。



第11図 SC120・SC328 遺構実測図



第12図 SC453 実測図

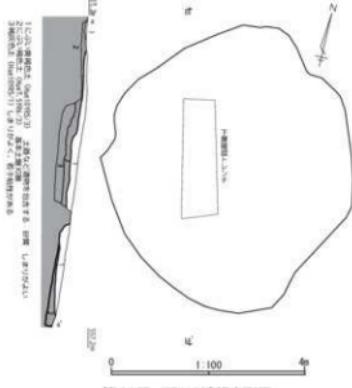


第13図 SC476・SC524 遺構実測図

**SC476 陥し穴跡（第13図 - 左）** 基本土層**X**層上面のB-3gr南側において検出した。S197に切られている。長軸0.85m、短軸0.65m、深さ0.65mである。断面形はバケツのような形状を呈しており、底面は平坦である。壁面の観察では基本土層**X**層からその下の黒色土まで掘り込んでいる。底面に逆茂木の痕跡は検出していないが、形状から陥し穴跡と考えられる。

**SC524 土坑（第13図 - 右）** 基本土層**X**層上面のB-5gr東側において検出した。東西1.5m、南北1.6m、検出土面からの深さ0.4m。平面形は隅丸正方形で、断面形は逆台形を呈する。土層は下層に褐色土、上層に橙褐色土のブロックを含む褐色土が堆積しており、開口して土が堆積した後、人為的に一度に埋められたと考えられる。遺構内からは土師器胴部2点、遺構表面から土師器片1点が出土している。遺構の埋没時期は、出土遺物から古墳時代と推定される。

**SZ614（第14図）** 基本土層**X**層上面のA-4・5、B-4・5grにおいて検出した。埋土中からは比較的多くの土師器・土器の破片が出土した。平面は不定形で、南北6.35m、東西6.5m、深さは0.2mである。明確な堀込みは認められず、造成以前に存在していた包含層の一部が削平を受けずに残ったものと考えられる。



第14図 SZ614 遺構実測図

### 第3節 出土遺物

本調査区から出土した遺物はコンテナ6箱分である。少量の遺構内出土遺物を除くと、調査区内で安定した遺物包含層が存在せず、検出面とした基本土層X層の表面で遺物が出土している。ただし、S2614は造成以前に存在していた遺物包含層の一部であったと考えられる。

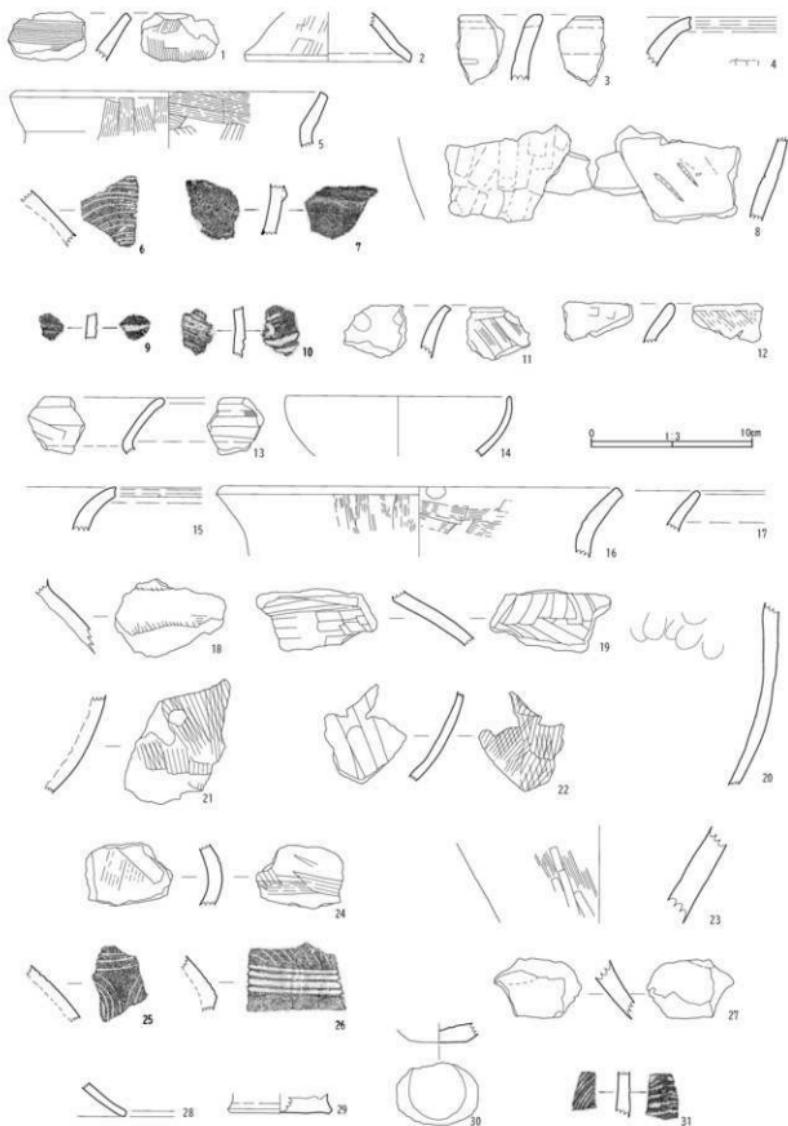
時期別に出土遺物を概観すると、縄文時代後期の磨消繩文土器、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて熊本県球磨地方を中心に分布する免田式土器の長頸壺、土師器、肥後系脚付壺、中世の龍泉窯系青磁・景德鎮窯系染付、近世以降の国産陶磁器類がある。各出土遺物の種類・名称・法量などについては、遺物觀察表（第2表～第4表）に記載している。以下、主要なものについて概述する。

**土器・土師器類（第15図1～31）** 1はSC351から出土した土師器の口縁部である。内外面にナデ調整が見られる。2はSC524から出土した土師器脚付壺の脚部片である。3・4はS2614から出土した。6は弥生時代後期～古墳時代初頭頃の免田式土器長頸壺の胴部片で、重弧文が施されている。7は弥生時代後期の工字突蒂文土器の胴部で、突蒂が施されている。9～31は検出面であるX層表面または周辺での表採等で出土した遺物である。9・10は磨消繩文土器の胴部片である。21・22は土師器の胴部片で、外面はハケ目調整が施されており、布留系土器の壺の胴部と考えられる。25・26は弥生時代後期～古墳時代初頭頃に見られる免田式土器長頸壺の胴部片で、重弧文が施されている。27は肥後系の土師器脚付壺の脚部片である。内面に砂が付着する。

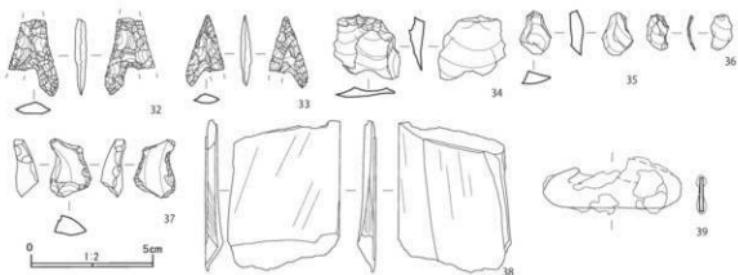
**石器・鉄製品類（第16図32～39）** 32・33はチャート製の打製石鏃である。32はA-5grのSC532から出土しており、先端と片脚を欠損している。33はS2614から出土しており、片脚を欠損している。34～37はチャート製の剥片である。37は剥離面の稜線が潰れており、火打石片と考えられる。38は砂岩製の砥石である。側面は擦切って整形されており、両面には研磨痕が見える。39は鉄製の火打金である。

**陶磁器類（第17図40～59）** 40・41は龍泉窯系の青磁碗片である。40は内面に蓮華文が描かれており、口縁部の端部が玉縁を呈する。41は外面に縦方向の櫛目が入る。大宰府分類I類（太宰府市教育委員会2000）に属するものと考えられる。42は青磁碗の口縁部である。43～46は景德鎮窯系陶磁器の破片である。43は碗の口縁部で、端部が外反する。内外面に界線が描かれる。44は皿の口縁部である。内外面に界線が描かれる。小野分類III群IX類のものと考えられる。45は椀の胴部から高台が残存している外面に唐草文、見込みに界線が描かれており、見込みの断面は外面から内面に押し出されている。小野分類VII類（漫頸心碗）（小野1982）のものと考えられる。46は碗の高台付近で、見込み内に界線と蓮華文、高台外側に界線が描かれている。47～58は近世以降の国産陶磁器類である。47は唐津焼の碗の口縁部片である。端部は外反し、釉薬に貫入が入る。17世紀後半のものとみられる。48～50は碗の口縁部片である。52は白磁の碗で、花が陰刻されている。

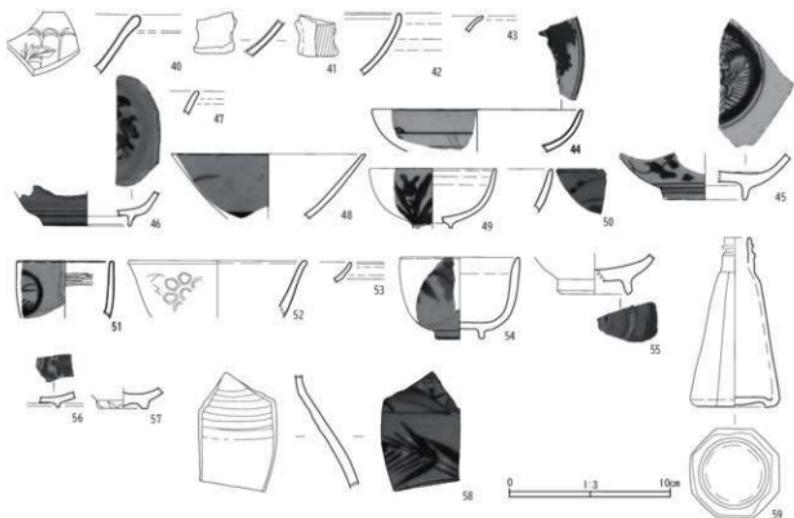
その他（写真1）SA33の炉跡の埋土をフローテーションし、炭化種実等の採取を行った結果、埋土中よりオオムギ・堅果類などを採集した。



第15図 遺物実測図①(土器・土師器類)



第16図 遺物実測図②(石器・鉄製品類)



第17図 遺物実測図③(陶磁器類)

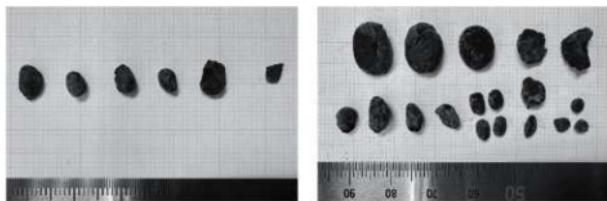


写真1 SA33 炉跡出土炭化種実(左:焼土(2層)より採取、右:焼土下の褐色土(3層)から採取)

第2表 遺物観察表①（土器類）

遺物 番号	種別	部位	出土地点	口径	法量(cm) 直径		調整技法 基質 内面 外面		色調 外見	構成	出土	備考
					幅	高さ	内面	外面				
1	土器	口縁部	SS-SC01		ナメ	ナメ (2.59±0.4)	直壁	直壁	茶褐色 (2.59±0.4)	直壁	3m以下の中西側と5m以下の中西及び北東斜面を少箇占む	
2	土器	底部	SC04	口径	ナメ	ナメ (1.98±0.3)	直壁	直壁	茶褐色 (1.98±0.3)	直壁	3m以下の中西側をわずかに含む。1m以下の中西及び北東斜面を少箇占む	
3	土器	口縁部	SZ014		ナメ	ナメ (1.95±0.3)	直壁	直壁	3m以下の中西側と1m以下の中西及び北東斜面を少箇占む	直壁	3m以下の中西側を含む。1m以下の中西及び北東斜面を少箇占む	
4	土器	底	SZ014		ナメ	ナメ (1.97±0.3)	直壁	直壁	3m以下の中西側を含む。	直壁	3m以下の中西側を含む。直壁を除く北東斜面を少箇占む	
5	土器	底	SZ014	口径	ナメ	ナメ (2.59±0.4)	直壁	直壁	3m以下の中西側を含む。	直壁	3m以下の中西側と2m以下の中西及び北東斜面を少箇占む	
6	土器	底部	SZ014		ナメ	ナメ (1.95±0.2)	直壁	直壁	3m以下の中西側と直壁を除く北東斜面を少箇占む	直壁	3m以下の中西側と直壁を除く北東斜面を少箇占む	直壁式、裏面文
7	土器	底部	SZ014		ナメ	ナメ (1.95±0.2)	直壁	直壁	3m以下の中西側と直壁を除く北東斜面を少箇占む。1m以下の中西及び北東斜面を少箇占む	直壁	3m以下の中西側と直壁を除く北東斜面を少箇占む	直壁式
8	土器	底	SZ014		ナメ	ナメ (1.95±0.2)-7.5	直壁	直壁	3m以下の中西側と直壁を少箇占む。	直壁	3m以下の中西側と直壁を少箇占む	
9	土器	底部	S4		ナメ	ナメ (1.95±0.2)	直壁	直壁	3m以下の中西側と直壁を少箇占む。	直壁	3m以下の中西側と直壁を少箇占む	裏面文
10	土器	底部	口～G1-2		ナメ	ナメ (1.95±0.2)	直壁	直壁	3m以下の中西側と直壁を少箇占む	直壁	3m以下の中西側と直壁を少箇占む	裏面文
11	土器	底部	A1		土器テ	土器テ (2.59±0.3)	直壁	直壁	3m以下の中西側を少箇占む	直壁	3m以下の中西側を少箇占む	
12	土器	口縁部	S4		ナメ	ナメ (1.98±0.3)	直壁	直壁	3m以下の中西及び北東斜面を少箇占む。1m以下の中西及び北東斜面を少箇占む	直壁	3m以下の中西及び北東斜面を少箇占む	
13	土器	口縁部	A-口～E		ナメ	ナメ (1.95±0.2)	直壁	直壁	3m以下の中西側と直壁を少箇占む。	直壁	3m以下の中西側と直壁を少箇占む	
14	土器	底	口～脚15	口径	ナメ	ナメ (3.39±0.5)	直壁	直壁	3m以下の中西側と直壁を少箇占む。	直壁	3m以下の中西側と直壁を少箇占む	
15	土器	口縁部	吉原		ナメ	ナメ (1.95±0.2)	直壁	直壁	3m以下の中西側と直壁を少箇占む。	直壁	3m以下の中西側と直壁を少箇占む	
16	土器	底	口縁部 吉原		ナメ	ナメ (2.59±0.3)	直壁	直壁	3m以下の中西及び北東斜面を少箇占む。1m以下の中西及び北東斜面を少箇占む	直壁	3m以下の中西及び北東斜面を少箇占む	
17	土器	底	口縁部 吉原		ナメ	ナメ (1.95±0.2)	直壁	直壁	3m以下の中西及び北東斜面を少箇占む。1m以下の中西及び北東斜面を少箇占む	直壁	3m以下の中西及び北東斜面を少箇占む	
18	土器	底	吉原-G14		ナメ	ナメ (2.59±0.2)	直壁	直壁	3m以下の中西及び北東斜面を少箇占む。	直壁	3m以下の中西及び北東斜面を少箇占む	
19	土器	底	吉原-脚15		ナメ	ナメ (3.39±0.5)	直壁	直壁	3m以下の中西及び北東斜面を少箇占む。	直壁	3m以下の中西及び北東斜面を少箇占む	
20	土器	底部	吉原		ナメ	ナメ (1.95±0.2)	直壁	直壁	3m以下の中西及び北東斜面を少箇占む。	直壁	3m以下の中西及び北東斜面を少箇占む	内部に一部擦痕あり
21	土器	底	G-25-9-2		ナメ	ナメ (1.95±0.2)	直壁	直壁	3m以下の中西及び北東斜面を少箇占む	直壁	3m以下の中西及び北東斜面を少箇占む	吉原系、一部工具付着
22	土器	底	吉原	口～G1-2	ナメ	ナメ (1.95±0.2)	直壁	直壁	3m以下の中西及び北東斜面を少箇占む	直壁	3m以下の中西及び北東斜面を少箇占む	吉原系、工具付着
23	土器	底部	吉原土		ナメ	ナメ (1.95±0.2)	直壁	直壁	3m以下の中西及び北東斜面を少箇占む。	直壁	3m以下の中西及び北東斜面を少箇占む	
24	土器	底	吉原		ナメ	ナメ (1.95±0.2)	直壁	直壁	3m以下の中西及び北東斜面を少箇占む。	直壁	3m以下の中西及び北東斜面を少箇占む	
25	土器	脚	吉原	S-C1-A-3-4	ナメ	ナメ (1.95±0.2)	直壁	直壁	3m以下の中西及び北東斜面を少箇占む。	直壁	3m以下の中西及び北東斜面を少箇占む	吉原系、裏面文
26	土器	底	吉原	口～G1-2	ナメ	ナメ (1.95±0.2)	直壁	直壁	3m以下の中西及び北東斜面を少箇占む。	直壁	3m以下の中西及び北東斜面を少箇占む	吉原系、裏面文
27	土器	脚	吉原	A-(S-1)-(C-1)	ナメ	ナメ (1.95±0.2)	直壁	直壁	3m以下の中西及び北東斜面を少箇占む。	直壁	3m以下の中西及び北東斜面を少箇占む	吉原系付着部、内側に一部擦痕あり
28	土器	底	吉原	吉原	ナメ	ナメ (2.59±0.2)	直壁	直壁	3m以下の中西及び北東斜面を少箇占む。	直壁	3m以下の中西及び北東斜面を少箇占む	
29	土器	底	吉原	M	ナメ	ナメ (1.95±0.2)	直壁	直壁	3m以下の中西及び北東斜面を少箇占む。	直壁	3m以下の中西及び北東斜面を少箇占む	
30	土器	底	吉原	G1-25	ナメ	ナメ (1.95±0.2)	直壁	直壁	3m以下の中西及び北東斜面を少箇占む。	直壁	3m以下の中西及び北東斜面を少箇占む	
31	漆器	漆器	吉原		白灰 漆	白灰 ナメ (2.59±0.2)	直壁	直壁	白灰 (2.59±0.2)	直壁	3m以下の中西及び北東斜面を少箇占む	

第3表 遺物観察表②（石器・鉄製品類）

回数 番号	種別	素材	出土地点	法量(cm) 幅×高 度		重量	備考
				最大幅	最大厚		
32	石器	チャート	A5-SC532	3.1	2.1	0.45	2.2g 光輝、片側欠損
33	石器	チャート	SZ614	2.9	1.6	0.45	1.3g 片側、光輝
34	鉄	チャート	SZ614	2.6	2.7	0.5	3.1g
35	鉄	チャート	D-G1-2	1.8	1.3	0.5	1.1g
36	鉄	チャート	吉原	1.4	0.9	0.1	0.2g
37	火打石	チャート	吉原	2.4	1.7	0.9	3.4g 黒の斑駁、打撲跡
38	槌石	研磨	吉原	6.2	4.6	0.8	28.9g 削ぎ跡あり、両面を使用
39	火打石	鉄		5.7	2.2	0.3	16.1g



## 第IV章 自然科学分析

株式会社 古環境研究センター

### 第1節 自然科学分析の概要

樋口遺跡から採取された試料（炭化材）について自然科学分析を行った。分析内容は、放射性炭素年代測定4点、樹種同定2点である。以下に、各分析項目ごとに試料の詳細、分析方法、分析結果および考察・所見を記載する。

### 第2節 放射性炭素年代測定

1. はじめに 放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素( $^{14}\text{C}$ )の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である（中村2003）。

2. 試料 試料は、SA33（竪穴建物跡）、SC92（竪穴遺構）、SC120（土坑）、SC328（陥し穴跡）から採取されたNo.1、No.2、No.3、No.6の4点である。第6表に試料の詳細を示す。

### 3. 方法

前処理として酸-アル

カリ-酸処理（AAA処理）

を実施し、加速器質量分析法（AMS法）で測定を行った。

### 4. 測定結果

AMS法によって得られた $^{14}\text{C}$ 濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素( $^{14}\text{C}$ )年代および曆年年代（較正年代）を算出した。第6表にこれらの結果を示し、第18図に各試料の曆年較正結果（較正曲線）、第19図に曆年較正年代マルチプロット図を示す。

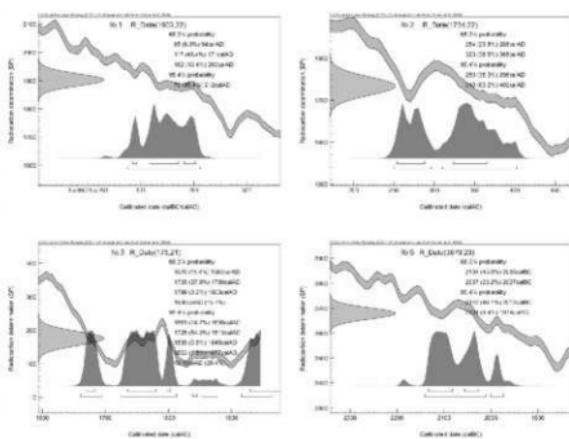
#### (1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )。

この値は標準物質（PDB）

第6表 樋口遺跡の放射性炭素年代測定結果

試料 No. (試料 名)	採取地 点	種類	測定 方法	$\Delta^{14}\text{C}$ (‰) ( $\text{PDB}$ )	$T_{\text{age}}$ (yr BP) ( $\pm 1\sigma$ )	測定誤差 (±1σ) (‰)	較正(±1σ)	
							未較正 (‰)	較正 (‰)
1 221001 SA33, 竪穴建物跡 近世材	AAA処理 未処理	20.1 ± 0.9, 30	1600 ± 100	-16.9 ± 0.2	16.1 ± 0.7 (16.0 ± 0.6)	±0.1 (±0.1)	-16.1 ± 0.7 (16.0 ± 0.6)	-16.1 ± 0.7 (16.0 ± 0.6)
2 221002 SA33, 竪穴遺構 近世材	AAA処理 未処理	20.1 ± 0.9, 31	1720 ± 120	-17.8 ± 0.2	16.1 ± 0.7 (16.0 ± 0.6)	±0.1 (±0.1)	-16.1 ± 0.7 (16.0 ± 0.6)	-16.1 ± 0.7 (16.0 ± 0.6)
3 221003 SA33, 土坑 近世材 LPF+AAA処理	AAA処理 未処理	20.1 ± 0.9, 30	1800 ± 100	-17.8 ± 0.2	16.1 ± 0.7 (16.0 ± 0.6)	±0.1 (±0.1)	-16.1 ± 0.7 (16.0 ± 0.6)	-16.1 ± 0.7 (16.0 ± 0.6)
4 221004 SA33, 陥し穴跡 近世材	AAA処理 未処理	20.1 ± 0.9, 30	1600 ± 100	-16.7 ± 0.2	16.1 ± 0.7 (16.0 ± 0.6)	±0.1 (±0.1)	-16.1 ± 0.7 (16.0 ± 0.6)	-16.1 ± 0.7 (16.0 ± 0.6)



第18図 曆年較正結果

の同位体比からの千分位偏差(‰)で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25(‰)に標準化することで同位体分別効果を補正している。

### (2) 放射性炭素( $^{14}\text{C}$ )年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、現在(AD1950年基点)から何年前かを計算した値。 $^{14}\text{C}$ の半減期は5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を使用している。付記した統計誤差( $\pm$ )は $1\sigma$ (68.2%確率)である。 $^{14}\text{C}$ 年代値は下1桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下1桁を丸めない暦年較正用年代値を併記した。

(3) 暦年代(Calendar Years) 放射性炭素( $^{14}\text{C}$ )年代を実際の年代値に近づけるために、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度の変動や $^{14}\text{C}$ の半減期の違いを較正している。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な $^{14}\text{C}$ 測定値および福井県水月湖の年縞堆積物データなどにより作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータはIntCal20、較正プログラムは0xCal14.4である。暦年代(較正年代)は、 $^{14}\text{C}$ 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を表し、0xCalの確率法により $2\sigma$ (95.4%確率)で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の値が表記される場合もある。( )内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は $^{14}\text{C}$ 年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

5. 所見 加速器質量分析法(AMS)による放射性炭素年代測定の結果、No.1(SA33)では $1900 \pm 20$ 年BP(2σの暦年代でAD76~212年)、No.2(SC92)では $1730 \pm 20$ 年BP(AD250~296,310~402年)、No.3(SC120)では $180 \pm 20$ 年BP(AD1661~1695,1725~1813,1839~1845,1853~1877,1916~年)、No.6(SC328)では $3680 \pm 20$ 年BP(BC2142~2012,2001~1974年)の年代値が得られた。なお、樹木(炭化材)による年代測定結果は、樹木の伐採年もしくはそれより以前の年代を示しており、樹木の心材に近い部分や転用材が利用されていた場合は、遺構の年代よりも古い年代値となることがある。

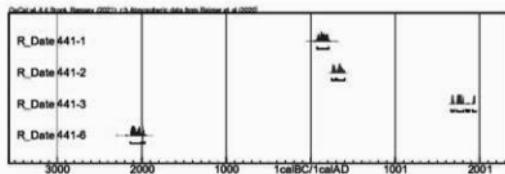
### 第3節 樹種同定

1. はじめに 木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料 試料はSC120から採取された炭化材2点(No.4, No.5)である。試料の詳細を第7表に示す。

3. 方法 以下の手順で炭化材の樹種同定を行った。

- 1) 試料を洗浄して付着した異物を除去
- 2) 試料を割折して木材の基本的三断面(横断面:木口, 放射断面:粂目, 接線断面:板目)を作成
- 3) 落射顕微鏡(40~1000倍)で観察し、木材の解剖学的形質や現生標本との対比で樹種を同定



第19図 暦年較正年代マルチプロット図

4. 結果 第7表に同定結果を示し、写真2に各分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった木材構造の特徴を記す。

- 1) クスノキ科 Lauraceae 中型から小型の道管が単独および2～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。道管の穿孔は単穿孔のものが存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる異性放射組織型で1～3細胞幅である。以上の特徴からクスノキ科に同定される。クスノキ科には、クスノキ、ヤブニッケイ、タブノキ、カゴノキ、シロダモなどがあり、道管径の大きさ、多孔穿孔および道管内壁のらせん肥厚の有無などで典型的なものは細分できるが、道管径以外が不明瞭なためクスノキ科の同定にとどめた。
- 2) サクラ属 Prunus バラ科 丸い道管が単独あるいは2～3個放射方向および斜め方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は同性に近い異性放射組織型を示す。以上の特徴からサクラ属に同定される。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。

#### 5. 所見 樹種同定の結果、

SCI20 から採取された炭化材のNo.4（サンプル1）はクスノキ科、No.5（サンプル2）

はサクラ属と同定された。クスノキ科は、概して強さ中庸で、油分が多く耐水性があり建築材や井戸側板などに利用される。薪炭材としては、油分が多く火持ちの良い材である。クスノキ科のクスノキは防腐・防虫作用がある。

サクラ属は、耐朽・保存性の高い材で、切削・加工の難度は中庸で概して堅硬な材であり、鉢などの容器に利用される。サクラ属の薪材は、火持ちなどはカシ類やナラ類に劣るが、比較的早く着火することから中薪に利用される。

第7表 横口遺跡における樹種同定結果

No.	試料の詳細	結果（学名／和名）
4	SCI20. サンプル1	Lauraceae クスノキ科
5	SCI20. サンプル2	Prunus サクラ属

写真2 横口遺跡の木材写真

## 第V章 総括

樋口遺跡は室野川に面した南向き斜面に立地しており、今回の調査では散発的ではあるが縄文時代から近世までの遺構・遺物を検出した。以下、各時期の様相について概述し総括とする。

**縄文時代** 縄文時代後期の磨消繩文土器片が出土しており、陥し穴跡が検出された。2点出土した打製石鎚はチャート製で、石核や一定量の加工剥片は出土していないため廃棄されたものと考えられる。

**弥生時代・古墳時代** 竪穴建物跡1基・土坑2基が検出された。出土遺物には、免田式土器長頸壺・布留系壺の胴部片があり、弥生時代の終わりから古墳時代前期にかかる時期のものである。炭素年代測定の結果、SA33 炉跡と SC92 の炭化物を使用した放射性炭素年代測定では、SA33 で弥生時代後期、SC92 で弥生時代後期から古墳時代前期にあたる年代を得た。室野川を挟んだ対岸には古墳時代後期の集落跡である広木野遺跡や広木野横穴墓が分布しており、樋口遺跡はそれらに先行する集落の一部だったと考えられる。当該期の竪穴建物は1棟のみの確認であったが、集落の中心は隣接地に残存している可能性が考えられる。

**中世～近世** 掘立柱建物跡4棟・土坑1基が検出された。遺構からの出土遺物は確認されていないが、SC120 で出土した炭化材の炭素年代測定では17世紀初頭の数値を得ている。調査区内では SC120 と同形の直径1mほどの円形の土坑が多数見つかっている（第5表）。時期は特定できないが、それらの埋土は基本土層のVII層またはIX層に由来するもので、第20図のような分布状況にある。基本土層 I～VI 層は水田や畠での耕作や段々畠とするための造成によって堆積しており、VII層以下はそれ以前の耕作



第20図 遺構埋土別分布図

等で使われていた際の堆積土である。SC120 の埋土はIX層由来の黒色土であることから、VII・IX層の堆積時期は17世紀初頭以降と考えられる。SB615は北側梁行に沿う形で溝跡(S617)を伴っている。S617はSA33・S28・30と切り合い関係にあり、掘削順序はSA33→S617→S28・30である。S28・30の埋土はSC120と同じIX層由来の黒色土であることから、SB615はSC120と同時期かそれ以前に使用された建物と推測される。また、他のSB491・492・493は、梁行のプランや建物の配置から同時期に建っていた建物跡と考えられ、SB615とは柱穴間の距離や床面積が近似する事から近い時期の遺構とみられる。以上から、間接的ではあるが槽口遺跡で検出した掘立柱建物跡は、近世またはそれ以前の所産であると考えられる。

以上のように槽口遺跡の調査では、縄文時代から近世に至る斜面の土地利用の一端を示す情報を得ることができた。

## 【引用・参考文献】

### □研究論文

- 伊東隆夫・山田昌久 2012『木の考古学。出土木製品用材データベース』海青社 pp449  
乙益重隆 1960「二 高千穂の先史文化」『高千穂 阿蘇-総合学術調査報告』神道文化会 pp59-78  
小野正徳 1982「15-16世紀の染付陶、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2 pp71-87  
甲斐亮典 監修 2008『図説東白杵・西白杵の歴史』宮崎県の歴史シリーズ 國土出版社  
後藤寅五郎 1938(1951再刊)『村のおもかげ』『村のおもかげ』編纂委員会  
島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塙倉高義・石田茂加・重松頼生・須藤彰司 1985『木材の構造』文永堂出版 p290  
島地 謙・伊東隆夫 1988『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣 p296  
中村俊夫 2000『放射性炭素年代測定法の基礎』日本先史時代の14C年代編集委員会編『日本先史時代の14C年代』日本第四紀学会 pp3-20  
中村俊夫 2003『放射性炭素年代測定法と曆年代較正』『環境考古学マニュアル』同成社 pp301-322  
宮崎敬史 2001『所謂免田式土器の再吟味-免田式土器様式の研究の前に-』『久保和土君追悼考古論文集』久保和土君追悼考古論文集刊行会 pp45-68  
北郷泰道 1978『祖母・傾山系山岳地域論序説』『考古学研究』25-3 考古学研究会 pp71-85  
北郷泰道 1983『祖母・傾の南-その考古学的世界-』『えとのす』22 新日本教育図書 pp124-130  
山田昌久 1993『日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成-用材から見た人間・植物関係史』『植生史研究』pp24  
吉田章一郎 1960『三 高千穂の原始文化』『高千穂 阿蘇-総合学術調査報告』神道文化会 pp78-88  
Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), pp337-360  
Paula J Reimer et al., (2020) The IntCal 20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 kcal BP) Radiocarbon, 62(4), pp725-757

### □発掘調査報告書等

- あさぎり町教育委員会 2022『本日遺跡のあゆみ』あさぎり町文化財調査報告書5  
熊本県教育庁文化課 2010『小野原遺跡群』熊本県文化財調査報告書257  
熊本県教育委員会 2019『幅・津留遺跡』熊本県文化財調査報告書336  
熊本県立裝飾古墳館 1993『弥生人の祈り 免田式土器の謎』企画展図録3  
五ヶ瀬町 1981『五ヶ瀬町史』  
五ヶ瀬町教育委員会 1990『下赤谷横穴墓群』五ヶ瀬町文化財調査報告書第1集  
太宰府市教育委員会 2000『太宰府条坊跡XV』太宰府市の文化財49  
宮崎県教育委員会 1998『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書』I  
宮崎県埋蔵文化財センター 1997『広木野遺跡 神殿遺跡A地区』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第7集





写真3 横口遺跡遠景（南西から）



写真4 調査区全景（上が北）

## 写真図版2



写真5 調査区中央部土層確認用壁面（東から）



写真6 調査区東壁土層断面（西から）



写真7 調査区周辺法面土層断面（南から）



写真8 SA33 炉跡検出状況（南から）



写真9 SC92 完掘状況（南西から）



写真10 SC328 完掘状況（南から）



写真11 SC473 完掘状況（南から）



写真12 SC524 完掘状況（南から）



写真13 SC120 炭化材出土状況（北西から）



写真14 SB491・492・493 完掘状況（オルソ画像）

写真図版4



写真15 出土土器類



写真16 出土陶磁器類



写真17 出土石器類

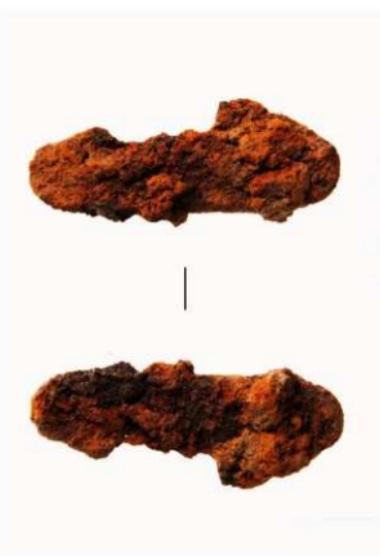


写真18 火打金

## 報告書抄録

---

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第267集

**樋口遺跡**

国道218号五ヶ瀬高千穂道路（室野工区）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2024年2月

発 行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地

TEL 0985(36)1171 FAX 0985(72)0660

印 刷 株式会社文昌堂

〒885-0004 宮崎県都城市都北町7166番地

TEL 0986(36)6600 FAX 0986(36)4660

---



Gokase Town

# Higuchi Site

The Report of Excavation by Miyazaki Prefectural Archaeological Center

vol.267

2024

Miyazaki Prefectural Archaeological Center